

御殿堰 大黒天便り



◆第四号◆

山形市中心市街地を流れる御殿堰。その豊かな水の流れを見守っているのが私「御殿堰大黒天」です。
「大黒天便り」では、わたし大黒天が御殿堰の歴史・季節の話題・生活の知恵など「なるほど!」と思っただけの内訳をお伝えしていきたいと思っております。今回は第四号です。

◆「やまがた景観賞」最高賞を受賞◆

「地域づくりのやまがた景観賞」最高賞の山形県知事賞に「水の町屋七日御殿堰」山形まるごと館紅の蔵」が選ばれました。

水の町屋七日御殿堰は、約四百年前に造られた石積みみの堰を復元。堰に沿って町屋とお蔵が配置されています。町屋風建物は耐火構造の木造建築としては東北地方最大。町屋は「山形で建てられてきた建物の中で一番美しい建物」をコンセプトに設計され建築され、町屋奥に建てられている大正時代・明治時代建築の座敷蔵・荷蔵は改装をしてテナントとして利用されています。
昔からある「山形ならではの風景を現代的に街並みに有り続けること」に意味があるのではないのでしょうか。
懐かしさ・山形らしさを感じていただける場所であり続けることで、皆様に繰り返し訪れていただける場所であり続けたいと願っております。今後ともよろしくお願致します。



いんねがっす

季節毎の「ほうじ茶」「いんねがっす」な話をさせていたただきたいと思えます。様々なウンチク・四方山話をネタに、日本文化・山形文化の素敵な所を皆さんで共有していきましょう。
(こちらのコーナーでは御殿堰にて皆様をお待ちしている各店舗御主人にご協力いただき作成していきます)

「着衣始」

月日の流れは早いもの。今月は霜月。「霜月」は文字通り霜が降る月の意味。他に、「食物月(おしものづき)」「略であるとする説や、「洞む月(しほむつき)」「未月(すえつき)」「神楽月(かぐらつき)」「子月(ねづき)」の別名もあるようです。そろそろ年末年始のイベントや準備のことが頭をよぎる季節です。
日本には、「着衣始」という言葉があることから、「新年になってから新しい着物を着る」という文化があることが分かります。「着衣始」は三が日の吉日を選んで行われる江戸時代からの慣わしです。日本に根付いていた文化を掘り起こし、その文化の意味・時代背景に想いをめぐらすのも面白いですね。

『12/3 (金) 新店舗オープン』

御殿堰の蔵座敷に、「穏やかに暮らす、心地いいを贈る」をテーマに雑貨店がオープンします。日本の生活用品・工芸品を中心に四季を彩る生活雑貨が揃います。普段の暮らしが豊かになる、贈った相手が笑顔になる。日本のしつらいに根差した丁寧な生活づくりの心が伝わりつつおきの贈り物を、提案します。
十二月三日 金 十時開店
(来店、お待ちしております)

『温まります。すすきの割り』

焼酎を割る際、一般的にはお湯割りが定番。しかし北海道では「ほうじ茶」で割るのが定番。昭和50年ごろから北海道でも焼酎が飲まれるようになったのですが、当時は芋や麦等の本格焼酎は作っておらず、焼酎甲類が飲まれていたのだとか。元々北海道では、香りの強いほうじ茶がよく飲まれており、風味をつけてまるやかにするためにほうじ茶割りで飲まれるようになったようです。

この「ほうじ茶割」別名「すすきの割り」というのだとか。これからの寒くなる季節、「すすきの割り」を試してみませんか?

『年越蕎麦とは?』

大晦日に年越蕎麦を食べるのは日本人にとっては御馴染の習慣。様々ある諸説の中でいくつかご紹介いたします。
【運そば説】鎌倉時代、博多の承天寺で年末を越せない町人に「世直しそば」と称してそば餅を振る舞った。すると、その翌年から町人たちに運が向いてきたので、以来、大晦日に「運そば」を食べる習慣になったという。「運氣そば」あるいは「福そば」とも言う。

【そば効能説】「本朝食鑑」(元禄十年・1697)に蕎麦は「氣を降ろし腸を寛(ゆるく)し、能(よく)腸胃の滓穢積滯を鍊る」とあるように、そばによって体内を清浄にして新年を迎えるという説。薬味のネギは、清めはらう神官の禰宜(ねぎ)に通じる、との俗説もある。

【捲土重来説】ソバは「晩風雨にさらされても、翌朝陽が射せばすぐに立ち直る。それにあやかして「来年こそは」と食べる。

【金運説】金箔を打つとき、打ち粉にそば粉を使うと金箔の裂け目を防げ、裂け目が出て一箇所に寄ってくっつく。また、金銀細工師は飛び散った金銀の粉を掻き集める時にもそば粉を使う。そこから、そばは金を集めるという縁起で食べるようになったとする。

今年の年越蕎麦。どのような願いを込めて召し上がりますか?

山形あれこれ

①馬見ヶ崎川

馬見ヶ崎川は、山形市南東の奥羽山脈に源を発し北西に向かう河川。山形市街地東側を流れ、山形市長町・七浦付近で野呂川及び村山高瀬川と合流して白川となり、大字成安付近で須川に合流。延長は約一八・二km。馬見ヶ崎川は、周囲の地形に大きな影響を与えています。山形市の市街地は馬見ヶ崎川による扇状地に開けていて、馬見ヶ崎川は「暴れ川」として知られていました。川の水量は下流に行くほど少なく、その多くは山形市街地の地下に浸透し伏流水となり、扇端部分では井戸水として豊富に湧き出しています。江戸時代初期、西側にあった流れを治水工事により流れを北に変更。当時、山の頂上で治水工事の陣頭指揮を取った鳥居忠政が、馬上から川を見渡したことに由来して、馬見ヶ崎の名がつけられたのだそうです。
この江戸時代の治水工事の際に造られたのが「山形五堰」の原型とされています。
治水以前の馬見ヶ崎川は、文翔館のすぐ裏手を流れていたのだそうです。城下町を火災から守るため、川の流れを境に北側に「火」を扱う産業の町としたのだそうです。
従って、町の中にはその当時の産業名が現在も町名として使われています。

時代の流れからなのか、かつては昔を偲ぶことができた町名も、今となってはその町名が使われなくなりました。山形市の歴史・産業は、町名をキーワードに紐解いていくと、きつと面白い発見があるような気がします。
こちらのコーナーでは、山形五堰・馬見ヶ崎川などをキーワードに「あれこれ」を書き綴っていききたいと思います。

次号の発行は十二月七日です。来月も皆様と紙面でお会いできるのを楽しみにしています。

漆師町 材木町 蔵町 橋町 地蔵町